

3 キャリア教育ではぐくみたい力

「なりたい自分を見付け、その実現のために努力していく力」をはぐくむ。

- ・ 適切な自己表現力（自他の理解力やコミュニケーション力など）
- ・ 問題解決力（自己有用感や自己効力感に基づく未知のものに挑戦する意欲,直観力などを含む）
- ・ 強固な意志（気力・体力,粘り強さなど）

「なりたい自分」とは、職業面に限らず「～できるようになりたい」、「～のような大人になりたい」、「～な人生にしたい」などの、生き方、働き方に関する目標のことである。「なりたい自分を見付け、それに向けて努力していく力」は、「自らを更に成長させるための課題解決、困難克服に粘り強く取り組む力」と言い換えることもできる。

児童生徒が社会の変化に主体的に適応していけるようにするには、それまでの学習活動の中で味わってきた自己有用感や自己効力感などを基盤にしながら、自分を更に成長させる過程で出会う様々な課題を克服できるようにしていく必要がある。

国立教育政策研究所は、そのために必要な力を4領域、8能力に分類し、発達段階に応じた児童生徒のあるべき姿を「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」に示している(表2)。これは、キャリア教育を体系的に実践する上での明確な指針を示している点で大いに評価できる。しかし、8能力を常に意識しながら教育活動を展開するのは難しいこと、昨今は若者の職業人としての基礎的資質・能力の低下を指摘する声が大きくなっていることなどから、当センターでは、自他の理解力やコミュニケーション力などを含む「適切な自己表現力」、自己有用感、自己効力感やそれらに裏付けられた自信、意欲、直観力などを含む「問題解決力」、気力・体力、粘り強さなどを含む「強固な意志」の3点を重点にして教育活動を展開することが大切であると考えた(図10)。

これらの力を身に付けさせる出発点となるのは、なりたい自分を見付けることにある。

小学校段階のなりたい自分は、夢やあこがれ、興味・関心に基づく程度であろう。しかし、中学校、高等学校と発達段階が上がるにしたがって、自分の特性や技能、学力などと社会的な現実とのかわりから、より具体的で実現可能なものへと近づいていくものでなければならない。

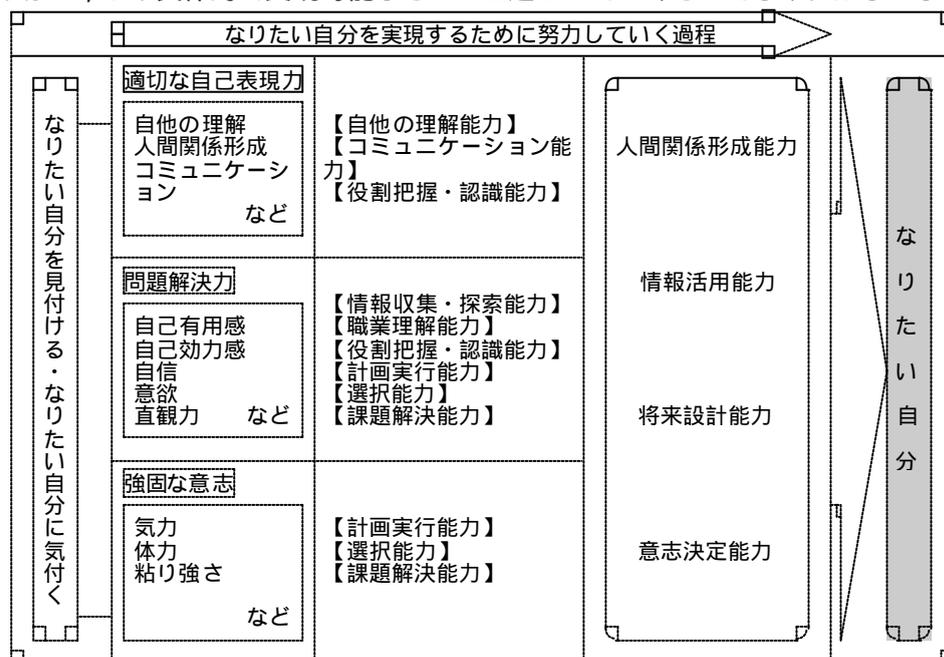


図10 キャリア教育ではぐくみたい力(「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」を基に作成)

